

小別沢新聞

8

August 2021

#007

TAKE FREE

発行：札幌市農政部
(TEL 211-2406)
編集：NPOあおいとり
(TEL 664-5148)
デザイン：3KG
(TEL 300-3333)

郵送による定期購読を希望される方は、札幌市農政部までご連絡ください。

里山活性化推進事業と 森林整備

前編

今回は、道内で森林整備の普及啓発に取り組んでいる栗田健さんをお招きし、札幌市農政部の石堂係長と、小別沢

で今秋から始まる予定の森林整備について話していただきました。前編後編の2回に分けてお届けします。



——さっそくですが、森林整備は何のためにやるのでしょうか
石堂：色々あると思いますが、木材利用という目的が一つ。規模は小さいですが、木材利用と環境保全を両立する林業を小別沢で実践し、発信したいと思っています。

栗田：小別沢は街に近いからこそ、効率重視の大規模林業（皆伐）よりも、少しずつ木を切る景観重視の小規模林業（間伐）が合っていると思います。
石堂：林業は分かりづらいですよね。1年で大きな変化があるわけではない。接する機会も少ない。
栗田：小別沢に多く見られる天然林（広葉樹）ですが、「手入れた山って雰囲気いいよね」と、森林に対する意識の取り掛かりとしては、良い環境だと思います。広葉樹は成長がゆっ



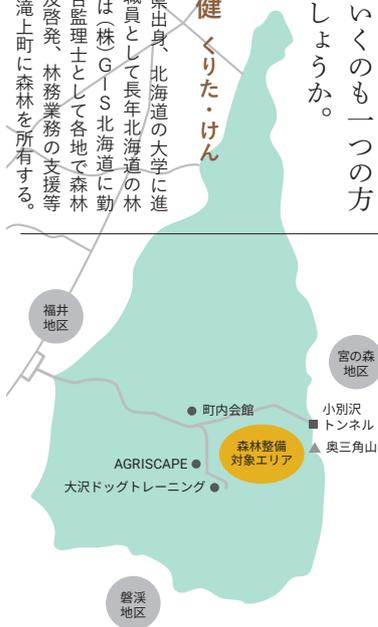
りなので、すぐには変わってくれないですが、10年後には必ず変わってきます。
——天然林（広葉樹林）は手を入れる必要はない、と感じる方も多いと思います

栗田：人工林と異なり、放っておいても自然淘汰されますし、土砂災害の心配も少ないと思いますが、人が関わることで森の活力、生物の多様性が増えていくことはあると思います。身近な森林の多くは、かつて燃料や建材確保のために1度切られており、そうした場所はなおさらです。また、街と自然の間には緩衝帯が必要です。里山という、人が手を入れる環境は、熊の防波堤にもなりうると思います。間伐やツル切りは、大切な手入れの一つです。
石堂：農業と一緒にですね。間引きや雑草を取らないといい野菜が育たない。
栗田：場所の特性に合った施業をしていくことが大切です。経過を見ながら地域にあったやり方を検証していくのも一つの方法ではないでしょうか。



栗田 健 くりた・けん

神奈川県出身、北海道の大学に進学。道庁職員として長年北海道の林業に関わり、現在は(株)G・S北海道に勤めながら、森林総合監理士として各地で森林整備の必要性の普及啓発、林務業務の支援等を行なう。自身でも滝上町に森林を所有する。



左記の森林整備範囲について、市と森林所有者との契約が終わりまりました。現在、林業者の公募・契約に向けた検討作業を行っています。

*町内会以外の方で初めて参加を希望される方は準備の都合上、事前に左記担当者までご連絡ください。
札幌市農政部農政課 松里・石堂
☎211,2406

第3回
小別茶話会

日時：8月13日(金) 16:00-17:30 延期

場所：小別沢会館 (札幌市西区小別沢49)

内容：事例紹介
「里山におけるもう一つの農業 発表者：三部英二」など

8/13に開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大状況をふまえ、延期します。

市からのお知らせ

小別沢のあの一トこのヒト

川合浩平さん

——経歴と小別沢で農業を始めたきっかけを教えてください

札幌市西区出身です。一時期は東京で働いていて、農業を始めたのは7、8年前です。子供が生まれたことが1つのきっかけ。就農に必要な研修の場として小別沢との縁ができて、2年間の研修後、そのまま独立しました。

——かわいふあ〜むのスタイルやこだわりは？

無農薬・無化学肥料で、年間50種類近くの野菜を育てています。日々試行錯誤しながら、よ



り良いものを作ることを大切にしています。農地は1.7ha(札幌ドーム1.2個分!)。ボランティアさんの助けもあります。基本的な作業は一人です。野菜は畑の直売所でも購入できます。季節によっておすすめ野菜が変わるので、旬を楽しんでもらえたら。

——いわゆる有機農業というのですか？

通常の有機栽培が取得する有

機JAS認定より厳しいものとして、「川合基準」を設定しています。有機JASでは使える農薬もありますが、かわいふあ〜むでは一切使いません。肥料についても様々な種類の中から、クオリティが担保されているものを選びます。化学物質過敏症のお客様のためにも、農園では例えば、市販の虫除けスプレーを遠慮していただいたりもしています。

——小別沢地区の今までとこれからについて、どう感じますか

7、8年前よりも新しい人が入ってきて、変わってきている雰囲気があります。一方で、高齢化により長い間、協力し合ってきた地域関係がうまく回らなくなるのでは、と心配しています。例えば、ゴミ拾いや会館のトイレ掃除を日々してくださっている方がいますが、いつまで続けてもらえるか…。これからの小別沢の地区運営を検討し取り組んでいける、同じ方向や目的を持った人が増えていったらいいなと思います。



かわいふあ〜む yasaibacca
営業日：夏は基本毎日(雨天はお休み)
時間：10:00頃(お野菜が並んでから)~17:00頃
詳細はFacebookページをご確認ください

むかしと いまの 小別沢 #1

現在の小別沢トンネル完成は平成15年(2003年)。それまでの70年あまり、大切に使われていたト

鎌田愛 かまだ・あい
札幌に生まれ育ち、現在は養護教諭として小学校に勤め、みんなが親しめるイラストを用いた保健だよりを作成するなど、保健室で日々奮闘中。夢は、いっか家族のコミックエッセイを出版すること。
ンネルがあったことを知っていますか。これは、そのトンネルができた時のお話です。



小別沢新聞

9

September 2021

#008

TAKE FREE

発行：札幌市農政部
(TEL 211-2406)
編集：NPOあおいとり
(TEL 664-5148)
デザイン：3KG
(TEL 300-3333)

郵送による定期購読を希望される方は、札幌市農政部までご連絡ください。

里山活性化推進事業と 森林整備

後編

前編に引き続き、道内で森林整備の普及啓発に取り組んでいる栗田健さんと札幌市農政部の石堂係長に、小別沢で

今秋から始まる予定の森林整備について話していただいた内容をお伝えします。

——小別沢の特性にあった森林整備の形とは



栗田：比較的に急斜面なので、森林作業道を開設する際に切る木が少なく済む、小規模林業が向いていると感じました。混んでいる場所については、1度に2割くらいの本数を切っても雰囲気は変わらないと思いますし、林内に光を入れるためにはもう少し切っても良いと思います。石堂：山菜やキノコと同じ



意識で、森の成長量や回復力に合わせて木を切って利用させてもらおう、という意識が大切だと感じます。

——最後に、里山で森林整備をする意義とはなんでしょう

石堂：農と林は同じ1次産業ですが、「林」は身近に感じにくい。農も林も身近に感じられる里山は、人と自然の共生を考える場となり得るのではないのでしょうか。約200万人が住む札幌市において、里山的な生活観・価値観を有する地域は非常に貴重であり、コロナ禍の影響もあって、地域外の人にとっては大きな魅力として映ると思います。



栗田：森に感心のある人は確実に増えて来ていると思います。

田舎でも林業は身近ではなくて、総合学習で初めて木を切る場面を見る子供もいます。札幌だとさらにそういう機会は少ないでしょうね。今回、林業者が作業道をつくることで森に行きやすくなると思いますので、そういう文化をもう1度見えるようにしていく意味はあると思います。

石堂：林業だけやって誰も森に入れないのは勿体無いので、例えば、林業者が森林整備の説明会を開いたりなど、地域と話し合いながら、少しずつ、地域内外の人達にこの森(里山)を見てもらえるようにしたいと思っています。栗田：いろんな人が入って来たら、通常は使い道がなく林内に残ってしまうような端材などを活用できるアイデアや人材も出

てくるかもしれませんね。

石堂：農業で地産地消や食育というように、林業にも地材地消や木育という言葉がある。どうやって木が育ち、切ったり加工され、身の回りの製品になっていくかを学べる場が必要。街に近く、コンパクトな空間である小別沢は、市民が気軽に農と林を体験・学習できる唯一無二の場になれるのではないかと考えています。里山という言葉を使わずに、教育的役割を担うことは、小別沢地域の価値の向上やサポーターの増加、豊かな自然の保全にも繋がるのではないのでしょうか。



栗田健 くりた・けん

神奈川県出身、北海道の大学に進学。道庁職員として長年北海道の林業に関わり、現在は(株)GIS北海道に勤めながら、森林総合監理士として各地で森林整備の必要性の普及啓発、林務業務の支援等を行なう。自身でも滝上町に森林を所有する。



小別沢の あのヒト このヒト

小日向素子さん

— 経歴を教えてください

生まれも育ちも東京で、15年ほど会社員をしていましたが、だんだん自分がロボットのようを感じはじめました。自分に自信がなくなっていた時にリーマンショックを経験、このままではダメになると思い退職。その後、発展途上国を中心に世界各国を巡り、自分らしさを取り戻します。その経験を過去の自分と同じように悩んでいる人に提供したいと思い帰国。ブックラウンジ経営や、高齢化地域でのまち



おこしの過程で馬と出逢います。馬を通じた大人向けの研修プログラム開発のため、欧米でセラピーと人材育成メソッドを学び、独自のプログラムへと発展させ、埼玉県の牧場でトライアル営業を始め、日経ビジネス

に連載をしていました。この連載がきっかけで当時小別沢で牧場を経営していたステイブンさんから連絡をもらい、2017年に牧場と馬を引き継ぎました。

— どんなことをされているのですか

馬を先生とした学びの場を提供しています。現在の柱は3つ。1つ目は、アカデミックな

リーダー研修を行う「ホース

コーチング」。2つ目は、五感

とコミュニケーションを学ぶ

「ホースソマティック」。3つ目

は先月からスタートしたばかりの「コミュニティホース」と

いう馬の共同オーナー制度で、

月11,000円の会費をいた

だくことで牧場を維持し、地域

の子供たちに、馬と触れ合い

ながら学ぶプログラムを提供

するものです。

— 馬が先生、もう少し詳しく

教えてください

馬とは使役やスポーツとしての

関わり方が一般的ですが、私た

ちにとっては学びの先生。馬の

特性を使わせてもらいます。例

えば、馬にはミラー細胞という

ものが多く、人の内面を映し出

す鏡のように反応を返します。

また、あらゆる個性を受け入れ

る群れ組織で、馬同士、細やかな



株式会社 COAS
ピリカの丘牧場

詳細はHPをご確認ください
<https://www.coashp.com/>

な身体反応を通じてコミュニケーションを行います。そのような馬から、他者との関係性や非言語コミュニケーションを学ぶことができます。さらに、体が大きく力が強い馬と対峙することで、自然の偉大さを改めて思い起こすことにも繋がります。競馬や乗馬に適さない馬に存在価値はないのか、経済価値や能力だけで社会での存在意味を見出していないか、そんなことに思いを馳せる場にもしたいと思っています。

— 小別沢とこれからどう関わっていきたいですか

小別沢は大都市の裏にあつて、人と動物の境界のような場所。通常、牧場がある場所は自然寄りか人間寄りかのどちらかになりがちだけど、ここはそのバランスがちょうど良いと感じています。今後はコミュニティホースの取り組みを広げながら、牧場だけではなく、周囲の森林や畑、地域全体と絡んでいきたいというのが希望です。

里山事業の
スケジュール

4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
小別沢新聞		第7号		第8号 (この号)		第9号		第10号		第11号	
小別茶話会				第3回 8月13日金		延期 → 第3回		第4回		第5回	
森林整備 森林経営管理法			市と山主の契約		林業者の 公募に向けた準備		秋以降 市と林業者の契約				



むかしと いまの 小別沢 #2

「しばかり」って何か知っていますか。山に生える小さな雑木や小枝のことを柴といい、里山での人の

営みと柴刈りは共にありました。この物語は、小別沢の暮らしにも溶け込んでいた柴のお話です。

鎌田愛 かまだ・あい
札幌に生まれ育ち、現在は養護教諭として小学校に勤め、みんなが親しめるイラストを用いた保健だよりを作成するなど、保健室で日々奮闘中。夢は、いつか家族のコミックエッセイを出版すること。

小別沢直売所 MAP

小別沢に点在する直売所のマップ。新鮮な旬の野菜が並びます。ぜひはしごしてみてください!

黄色い看板 (Yellow sign)
自然歩道 (Natural path)

↑ 至 円山 (Up to Maruyama)

↓ 海部町 (Down to Uemachi)

第③回 小別茶話会

第3回小別茶話会の開催については改めて連絡いたします

市からのお知らせ

*町内会以外の方で初めて参加を希望される方は準備の都合上、事前に左記担当者までご連絡ください。

札幌市農政課 松里・石堂
☎211-2406

小別沢新聞

10

October 2021

#009

TAKE FREE

発行：札幌市農政部
(TEL 211-2406)
編集：NPOあおいとり
(TEL 664-5148)
デザイン：3KG
(TEL 300-3333)

郵送による定期購読を希望される方は、札幌市農政部までご連絡ください。

里山活性化推進事業と都市農業

今回は、札幌市農政部にて長年札幌の農業に携わってこられた三部英二さんに、これからの都市農業のあり方と小別沢との関わり方について話していただきました。

—— 三部さんが農業に興味を持ったのは？



最初のことからは、来るべき食料不安からでした。例えば、中国は30年前までは大豆自給国でしたが、現在は世界流通の6割近くを買い占め、さらに増加傾向は続いています。日本も大豆のほとんど(9割以上)を輸入しておりますので、食料問題は実はすぐ身近に迫ってきているという実状の中、九州の農民作家が日本の食料政策を悲観して「怖くて百姓をやめられない」という話を聞いたのが原点です。

—— 長年関わってきたからこそ感じる「農業」のあり方とは？

農業の本質は「農産物製造業ではない」と考えています。人間の遺伝子や健康、命を、より良いかたちで子供や後世に伝えていくというのが農業本来の役

割。未来を作り、未来へつなぐ農業は、農地だけではなく、地域、自然と景観、森と山と川の織りなす環境、文化、人、歴史遺産などが深く関係する。そしてそれらを取り巻くものを大事に受け継いでいくことが大切だと思います。「農業」という1つのコトだけではなく、「多様なコト」として関わりを持つていく、それがこれからの農業のあり方なのではないでしょうか。それを体現しようのが小別沢地域だと感じています。

—— 最近都市農業という言葉

を聞くことが増えてきました

最近よく耳にする6次化農業という言葉は、従来の作物生産(1次)という枠組みにとらわれることなく、加工商品づくり(2次)や、体験・観光サービスの提供(3次)など、地域のあらゆる資源を活用した経営を意味しています。資源豊かな小別沢地区では様々な人たちが連携していくことで、それが可能となります。さらに、小別沢は都市との距離が近いことから「都市農業」に向いている土地



であるとも考えられます。都市農業とは、身近な農業であり、顧客と直接繋がることができるとは、顧客(都市住民)とは「商品を生る先」とどまらず「一緒に育てる仲間」という関係が可能なのです。

また、山と里が近いことで、エンドファイト(内生菌)などが豊かな土壌を作り、多様さにあふれる土が見られます。土も人も農業のやり方も多様となりうる可能性を秘めているように感じています。生態系保全を大切にしたい農業は採種も大切ですので、この地にあった系統をイチから育てていくという取り組みもあるのではないのでしょうか。

まず大切にされた方が良いと思うのは、繋がる顧客について、連帯感を持つてやっていける人かどうかを見極めること。闇雲に仲間に入れてしまうことはよくないかもしれません。そして、個人的な妄想ですが、都市住民の生活自給率を向上させたいという想いがあります。生活自給率とは、自分の身の回りの衣食住をどのくらい賄えるかの指標で、いわば「生きるチカラ」のこと。小別沢には生活自給率を高める資源があります。農や食に限らず総合的な生きる糧を学ぶ場を今後作っていかたいいなと思っています。たとえば、建物も食器も食材も、エネルギーでさえも全て小別沢産というレストランを立ち上げるいうのも面白い。

小別沢には、そうした守るべきものの、新たなものを作り出す素材がたくさんあります。初めて小別沢を訪れた時に見た、夕焼けに染まる小別沢に心から感動したことを今でも覚えています。小別沢ならではの四季折々の景色を子孫に残していきたいです。



三部英二さんぶ・えいじ

1979年に札幌市入庁、農業センターにて野菜の品種・技術改良と農業指導を担当。その他、サツポロさくらなどの整備や地産地消の推進、伝統野菜の保全などに努める。現在は植物工場やバイオガス発電事業に携わる。

小別沢のあのヒト

佐藤勝馬さん

——農業を始められたタイミングは？

農業は親父の手伝いから始めたんだけど、わたしは結婚したタイミングで親父は街でアパート経営を始めたから、農業を引き継ぐことに。最初は野菜作りの参考にするために伊達や洞爺、壮瞥の方まで何回も視察に行ったもんだよ。色々試したけど苦労した。わたしと家内と馬



とでやっていた。当時作っていたのはトマト、キュウリ、ナスとかの野菜。オート三輪の後ろに積んで小別沢トンネルを超えて市場に持って行ってたの。

——市場はどちらまで？

20歳くらいまでは円山市場。その次は六条市場。持って行った野菜を八百屋さんに売るんだね。活気のある市場で、たくさん八百屋さんが仕入れにきていた。小別沢からオート三輪で30分くらい。市場は今と違って、並べて売ることまで全部を自分でやらないといけなかった。場所代を払って売り場を使わせてもらっていたんだ。

——六条市場に卸していた時は



どんな1日でしたか？

寝る時間なくて大変さ、よく聞いてくれたわ(笑)！

朝2時ころ起きて、前の晩に用意した荷物を持って市場に行くんだ。市場のスタート時間は決まってなくて、真夜中でも着いた人から始める。6時くらいまでは売る。それから帰って、売上のお金の計算して金庫にしまう。やっと朝ご飯にありついて仕事にかかると。収穫ばかりじゃなくて、草取りや消毒もある。作業はいくらでもある。晩までずっと畑で過ごして、採った野菜を売れるように整理するから、深夜まで働くことはよくあった。わたしは起きるのが苦手で家内に起こしてもらってたけど、家内は布団の中に入ると寝すぎるから椅子で寝てたよ。中央卸売市場が新しく出来

て、野菜の出荷先はそっちに変わった。手数料はかかるけど、野菜を運ぶだけだからだいぶ楽になったさ。

——小別沢といえば小松菜と聞きますが？

小別沢では結構早い段階から作り始めて、20年くらいは経つんじゃないかな。その前は農協からの依頼で春菊を作ったこともあった。小松菜は年に4回出荷する。別の農家は5回転というところもあるんじゃないかな。出荷した小松菜は小学校の給食に使われてるんだよ。

——今後の小別沢についてどう思われますか？

ここ数年でうちの井戸がすっかり枯れちゃって。ハウスは水がなかったらだめだから、他から運んでこないといけなくなつた。いったい何が原因なのかなあ。水道の水を畑に使ったらどうんだけお金かかるか！だから今年の夏は他の湧き水から毎日何回も車で運んだけど、大変だった。小別沢を取り巻く環境が変わってきてることなんだろうな。

六条市場に通っていた頃は、畑を他人に貸すなんてことは考えられなかった。今後、畑の使い方や小別沢に関わる人たちは時代の流れで変わって行くのかなと思う。それに合わせて考えていかないと。

里山事業のスケジュール

4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
小別沢新聞		第7号		第8号		第9号 (この号)		第10号		第11号	
小別茶話会				-第3回 8月13日金		延期 → 第3回 11月9日火		第4回 12月7日火		第5回	
森林整備 森林経営管理法			市と山主の契約		林業者の 公募に向けた準備		林業者の公募 (審査)		市と林業者の 契約		



むかしと いまの 小別沢

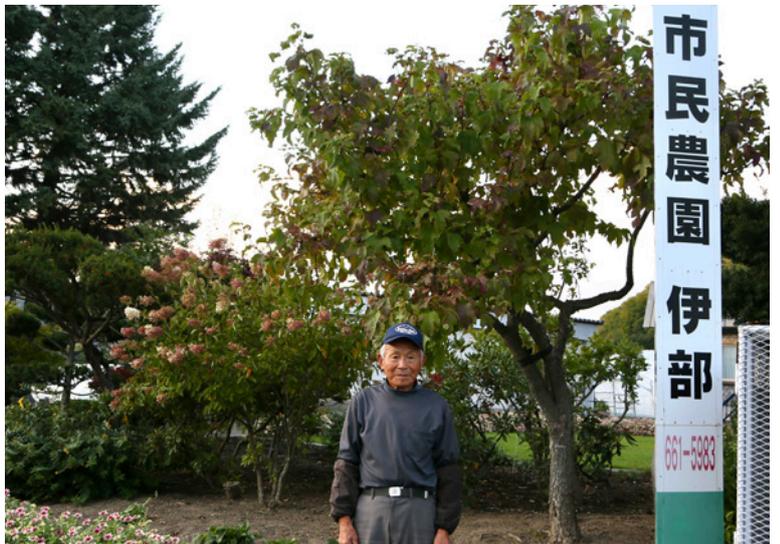
#3

その昔、小別沢の農家にとって馬は生活には欠かせない存在でした。今では馬耕をする馬は小別沢には

いなくなってしまうましたが、その名残りとして小別沢会館の前に馬頭観世音が残っています。

鎌田愛 かまだ・あい
札幌に生まれ育ち、現在は養護教諭として小学校に勤め、みんなが親しめるイラストを用いた保健だよりを作成するなど、保健室で日々奮闘中。夢は、いつか家族のコミックエッセイを出版すること。

伊部さんに聞く 市民農園



『今年の夏は今までで一番苦労したよ』そう語るのは、小別沢で市民農園を運営する「市民農園伊部」の伊部義幸さん。30年ほど前、営農の一環として有志と一緒に貸し農園を企画したものの、利用希望者が集まらず断念。それから数年後、今から23年前に札幌市農政部から提案を受けて80区画からスタートしたといいます。今では160区画余りに広がり、予約開始早々に埋まってしまいう大人気の市民農園です。

市民農園の管理で大変なのは水の提供。今年には特にコロナ情勢により屋外活動への関心が高まったせいも、農園は例年以上に賑やかな場所に。そんな中、あの猛暑とカラカラ天気。利用

者が頻繁に水まきをするので、用意した3つの水タンクはすぐに空になり、多い時は1日3回も補給したそうです。ポンプは手動操作なので、常に掛かりつきり。自分の仕事と重なって大変な時には娘さんの手も借りるなどし、主催者として利用者に不便をかけないよう、常に気を配っていることがわかりました。利用者の中には20年近く借り続けている人も多くいるそうです。都心から近距離で野菜作りができる好立地や、伊部さんの丁寧な対応がリピーターの心をつかんでいるのでしょう。



左図の森林整備範囲について、林業者の公募手続きが始まりました。林業者の企画提案書を審査した後、11月末頃に市と林業者が契約する見込みです。

*町内会以外の方で初めて参加を希望される方は準備の都合上、事前に左記担当者までご連絡ください。
札幌市農政部農政課 松里・石堂
☎211,2406

第3回 小別茶話会 開催のお知らせ

日時: 11月9日(火) 16:00-17:30
場所: 小別沢会館(札幌市西区小別沢49)
内容: 事例紹介
「里山におけるもう一つの農業」
発表者: 三部英二など

市からのお知らせ
新型コロナウイルスの影響により延期していた小別茶話会を開催いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

小別沢新聞

1

January 2022

#010

TAKE FREE

発行：札幌市農政部
 (TEL 211-2406)
 編集：NPOあおいとり
 (TEL 664-5148)
 デザイン：3KG
 (TEL 300-3333)
 郵送による定期購読を希望される方は、札幌市農政部までご連絡ください。

小別茶話会を終えて

第3回

2021年11月9日開催

新型コロナウイルス感染症で開催が延期されていた茶話会。今年度の1回目(11月9日(火)午後4時から始まり、参加者は9名(町内会員(特別会員含む)6名、その他3名)でした。

前回の茶話会から約1年ぶりということもあり、最初に、札幌市農政部の石堂係長から、「里山活性化推進事業」について、事業の全体像及び今後市が予定している森林整備について説明がありました。

その後は、小別沢の将来を考えていくための話題提供として、JFEエン지니어リング(株)北海道支店・顧問の三部英二さん(小別沢新聞#009に登場)を講師にお招きし「里山におけるもう一つの農業」と題するお話をいただきました。大規模・担い手集約型農業の難しさと生活自給率の低下に伴う都市の課題がある中、小別沢は農業の多様性(人材、栽培、経営

etc...)を増やし、発信していくことによって、人や歴史・風景も活かすことができる新たな地域になり得るのではないかと、という可能性の観点を示していただきました。

では、「都市農業におけるもう一つ」とはどういうものなのか。それを考える前に、一度原点に立ち返り、農業の定義を考えることが大切だと三部さんは言います。「業」の本質を知るといことは将来性を左右します。例えば『映画業』とは「映画を撮ること」が業なのか、それとも「エンターテイメントで観客を楽しませること」が業なのか。捉え方次第で可能性に違いや広がりが出てきます。「農業」はというと「その生産物を通して子や孫の世代の遺伝子を正しく守っていくこと」「天地人の合作によって人間の生命の糧を生み出す聖業」が本質であり、経済だけでは計りきれない

(新しい都市型農業のイメージ)

遊休農地の解消 安全・安心な食料確保



喜びや感動を伴う業であると捉えるべきなのでは、とのことでした。
 このような農業の位置づけを踏まえたいうえで、札幌の目指すべき農業についての話がありました。(新しい都市型農業のイメージ)参照)

札幌市は、都市という性質上、相続によって放置された耕作放棄農地がすでに300haに達しています。これらの農地を有効に活用し、次世代に健全な姿で引き渡すことは重要な課題となっています。その対応策としては、貸し借りの枠組みだけでは充分ではありません。従来規模の大きな生業の場としての農地(生業農)と、趣味的とも言っているような利用に供する小規模農地(自給農)。これらに加え、その中間的な規模の農地を担う、いわゆる文化的側面を重視した農業者層(文化農)を新たに位置付け、総合的に札幌の農業を支えていく、新しい都市農業という姿が提案されました。

三部さんのお話の後には、参加



者で活発な意見交換がなされ、「この話を次の世代である農業を継がない子供たちとも共有できる機会を作りたい」「今は農業を継がないと言っているけれども、いつか継ぎたいとなることもある。その時に、ちゃんと農地として残しておいてあげたい」などといった意見が出されました。

第4回 2021年12月7日開催

今年度第2回の茶話会は、12月7日(火)午後4時から前回同様小別沢会館にて行われました。参加者は12名(町内会員(特別会員含む)10名、その他2名)でした。主な話題は、今年度から(実際の整備は来年度以降)小別沢で進めていく森林整備を担う林業者の紹介でした。みなさんの関心が高く、過去最も多くの方々に参加していただく会となりました。

最初に、札幌市農政部の石堂係長から、森林整備の事業者が決定したことについて説明がありました。次に、事業者として選定された、outwoods 足立成亮さんの自己紹介に移りました。



outwoods 足立成亮さん

足立さんは約10年前から林業に関わり始め、現在はフリーランスの「木こり」として全道各地で活躍しているそうです。まずは足立さんがどんな想いや価値観を持って林業に取り組んでいるのか、といった話を、実際の写真とともに話していただきました。

足立さんが取り組んでいる林業は小規模林業といい、現在の林業の主流となっている大規模な施業方法とは異なる方法です。農業に例えると、昔の有機農業のような位置付けであると感じていて、最近ではそのような施業を環境保全型林業とも呼ぶようになったそうです。林業に取り組んでいく中で、理念として

「皆伐・再造林しない」を掲げ、携わる現場ごとの森林環境に即した林業、そしてその地域の生活環境に即した規模の林業を行うように心がけているとのこと。少し具体的に言うなら、長期的な山の利用が可能となるように、山と人の生活を繋げるのにふさわしい森林作業道を作ることや、山が本来持っている資源量や自然力をより増やす、その手助けをするような林業を大切にしているそうです。こうした理念が小別沢でも展開されていくことになりそうです。

また、街に住む人々にも森や山のことを考えてもらえるように、多面的なきっかけづくりをしたいという想いから、「森を街に持つてくる」をテーマに写真や工作物の展示、トークイベントなどの取り組みなども積極的に行っているのが、足立さんならではのの特徴といえそうです。

小別沢の森での具体的な施業計画については、2月頃に行う現地調査の結果を踏まえて計画する予定であり、その後改めてみなさんへの説明の場を設けたとのことでした。

その後は質疑応答の時間となり、地域住民の方や初参加の方から、積極的に質問やご意見をいただきました。「森林整備の具体的な施業内容を知りたい」、「地域として森林整備に関わる

方法はどんなものが考えられるか」、「森林整備に伴って出てくる木を使って、炭焼きイベントやホダ木の椎茸栽培をやってみたい」などといった意見が出されました。今後も、地域の声が共有・集約されたり、林業者など色々な人とつながる場として、茶話会が機能していくことが期待されます。また札幌市に対して、茶話会に参加したいけれど、参加できなかった方に向けた簡

単な報告資料を作成してほしいといった要望をいただきました。ご意見を参考に、今回の小別沢新聞から「茶話会報告書」を別紙で作成しております。さらに詳しく知りたい方は、ぜひそちらもご覧ください。

里山活性化推進事業のこと

や、森林整備のことなど、疑問質問等はお気軽に札幌市農政部にお問合せください。

ヤマ仕事中の足立成亮さん
写真提供: outwoods(山内麻由美さん)





むかしと いまの 小別沢

#4

小別沢の男達は、冬になると各地に出稼ぎに。山で木を伐り・枝を落とし・長さを整えて・里へ下ろし

てくる仕事をしていました。その時の材は、梁や柱や土台として今でも札幌の建物に使われています。

鎌田愛 かまだ・あい
札幌に生まれ育ち、現在は養護教諭として小学校に勤め、みんなが親しめるイラストを用いた保健だよりを作成するなど、保健室で日々奮闘中。夢は、いつか家族のコミックエッセイを出版すること。

里山活性化推進事業と 森林整備のあらまし



森林と農地が連なり、人と自然が共生している「里山」は、森林と農地が一体となり、生物多様性の保全や良好な景観の形成等の多面的機能を有しています。

しかし近年、農業従事者の高齢化や後継者不足等により、農地および森林の管理不足や、地域コミュニティの希薄化が進行し、里山の魅力の向上、活性化に向けた取り組みが課題となっています。

一方、林業分野においては、令和元年度の森林経営管理法の施行や森林環境譲与税の創設など、森林整備およびその促進に関する社会的な動きが強まっており、農業以外の分野との連携による一体的な施策など、地域の特色に応じた振興方策が重要と考えられます。

以上のような状況を踏まえ、西区小別沢をモデル地区として位置づけ、森林の保全を含めた、地域住民や農林事業者等を主体とする里山活性化の仕組みづくりを令和元年度より進めています。

なお、森林整備に関しては右記の整備範囲について、林業者が市の公募により決定致しました。

市からのお知らせ

新型コロナウイルスの影響により延期していた小別茶話会を開催いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

第5回 小別茶話会 開催のお知らせ

日時: 1月18日(火) 16:00-17:30

場所: 小別沢会館(札幌市西区小別沢49)

内容: 森林整備について他

※冬季は駐車場がありません。ご不便をおかけしますが、ご理解願います。

*町内会以外の方で初めて参加を希望される方は準備の都合上、事前に左記担当者までご連絡ください。

札幌市農政課 松里・石堂
☎211-2406

里山事業の スケジュール



小別沢新聞

2

February 2022

#011

TAKE FREE

発行：札幌市農政部
(TEL 211-2406)
編集：NPOあおいとり
(TEL 664-5148)
デザイン：3KG
(TEL 300-3333)

郵送による定期購読を希望される方は、札幌市農政部までご連絡ください。

小別茶話会を終えて

第5回

2022年1月18日開催

新年早々の1月18日(火)午後4時から小別沢会館にて行われました。参加者は6名(町内会員(特別会員含む)4名、その他2名)でした。

はじめに札幌市農政部の石堂係長より、里山活性化推進事業について、あらためて包括的な主旨や経緯の説明がありました。事業の要点は、市民主体の森林と農地の一体的な保全・活用の仕組みを『里山』というイメージで作っていくこと。森林については、国の制度(森林環境譲与税)を活用した管理・保全を行い、そこが豊かで魅力あふれる空間となることで地域全体の価値が上がるであろうこと。一方で、農地の今後の方向性としては、引き続き営農を基本として、多様な営農形態や農地活用を喚起すること。そして異業種間や地域内外の人々の交流・連携により、地域内の様々な活

動(事業)のさらなる発展や新たな取り組みが生まれていくことを目指しているとのことでした。里山としての地域の将来イメージは市として例示していませんが、あくまで地域内外の関係者の意向が基本となるので、引き続き協議・検討の必要があります。市としては、森林については整備を開始し、森林資源を活用できる機会をつくるとも



に、小別茶話会や小別沢新聞の発行を続け、みなさんの様々な活動や地域の将来を考えるための支援をしたい、としています。また、事業の進め方として、今後の課題は、多様なプレーヤーの発掘やその連携・協力関係、行政などとの連絡調整などをまとめて担い、里山の諸活動を民間側から束ねていくようなマネジメント機関の存在が必要なのではないかと、とのことでした。その後、森林整備の経緯や方



また、林業者からは10年間の施業予定についての話もありました。具体的には、今回の整備予定範囲18ヘクタールの中に、できれば延べ4,000メートル程度の森林作業道をつけることを検討していること。これは一般的には高密度の部類になりますが、小別沢の地域性にあった密度だと考えていること。間伐に関しては10年間の契約期間中に二周

向性についての説明が行われたのち、参加者と市、林業者との意見交換が行われました。参加者からは「今回の森林整備の計画は、里山を強く意識した内容にするのが良いのではないか」、「森林整備の計画は事前に地元関係者に対して説明の場を設けて欲しい」などといった意見が出されました。

する内容を想定しているという内容でした。今回の小別茶話会についても「茶話会報告書」を別紙で作成しております。詳しく知りたい方は、ぜひそちらもご覧ください。里山活性化推進事業のことや、森林整備のことなど、疑問質問等はお気軽に札幌市農政部にお問合せください。



小別沢のあのヒト このヒト

株式会社ルース研究所 代表取締役
篠原康幸さん



—— 経歴を教えてください

千葉県出身です。28年ほど前に、薬剤師として薬の研究を行うために北海道へやってきました。研究に携わるうちに原料から作りたいたいと思うようになり、縁あって小別沢に自社農園を設けるようになりました。

—— どんなことをされているのですか？

小別沢では、農園で様々な薬用植物を育てています。そこで

収穫した植物の有効成分を抽出し製品に加工する、という一連の流れを全て自社で行っています。抽出した成分の分析・研究も行っています。また、西18丁目駅の近くにショップ(有会社社エッセンシア)を構えています。小別沢で収穫した薬用植物を原材料にした、機能的食品や香水・化粧品・ハーブティール・精油などを取り扱っています。それ以外にも、漢方薬の処方も行っていて、予約制ですが健康相談も承っています。

—— 農園のことを詳しく教えてください

農園ではハマナスをメインに栽培しています。ハマナスは北海道各地で昔から自生してきた植物で、バラの仲間になります。収穫したハマナスの花からはいくつもの抽出方法によって、様々な成分が得られます。例えば、抗酸化作用に優れているポリフェノールやバラ水、精油、ミネラルなどです。これらは先述の製品の原料になっています。そして、成分が全て抽出された花は畑に返して肥料にし、循環型の農業をしています。



写真提供：篠原康幸さん

—— 小別沢とこれからどうやって関わっていききたいですか？

シードバンクという言葉を知っていますか？ 自社敷地内の森に生い茂っていた笹を手で刈り取ったところ、今まで何年も笹の下に眠っていた潜在植物が芽を出したのです。非常に興味深かったです。このように植物の種が地中にあるというのは、小別沢の魅力の一つだと思います。この冬から始まる森林整備事業とも協力して、林内に残される枝葉の活用などをして、豊かな地域づくりと、環境が持続するような森づくりに関わっていきたいです。

また、サロンのような、地域運営に関わる情報交換ができるような場ができればいいと思います。都市部と距離が近いということから、森や農地を舞台にした学びの場としてのポテンシャルがあることも小別沢の魅力です。全国的に「里山」が注目されてきているように感じますし、小別沢は安心して豊かに生活できるモデル地域となり得るのではないのでしょうか。

むかしと いまの 小別沢 #5

小別沢では昔、地域内で協力し年に何度か恒例行事がありました。そのひとつが「そりすべり大会」。会場は「伊部山」、今の伊部農園の

斜面でした。子供も大人も関係なく、そりすべり、パン食い競争、みかん拾い、雪中かけっこなどを全力で楽しみました。



鎌田愛 かまだ・あい

札幌に生まれ育ち、現在は養護教諭として小学校に勤め、みんなが親しめるイラストを用いた保健だよりを作成するなど、保健室で日々奮闘中。夢は、いつか家族のコミックエッセイを出版すること。



【伊部さんに聞いた昔話】



写真提供：outwoods (山内麻由美さん)

森林整備が はじまります

市の公募により決定した小別沢の森林整備を担う林業者である、outwoods 足立成亮さんにお話を聞きました。

——足立さんが林業に関わったきっかけは？

26歳のころ、「森の中で働く」というイメージから林業という仕事にたどり着きました。最初は滝上町の林業会社に就職し、林業についてイチから学んでいきました。そこから独立し、今

に至ります。自分の山を所有しているわけではなく、私有林や市町村林の管理経営に関するアドバイザー、間伐や森林作業道作り(道つけ)の請負などをしていきます。

——足立さんはどんな林業を得意とするのですか？

一言で表すのであれば、「環境保全型林業」です。北海道では大規模に行う林業が主流です。

一方で、私が行っているのは非常に小規模で

す。北海道において、このような規模感で行っている木こり(林業事業者)はごく僅かですが、小規模林業に向いている森林もあるため、各方面から声をかけてもらうことが増えてきました。

——なぜ「道つけ」が必要なのですか？

森という空間に人間社会が関わっていく以上、そこに入るための装置(道)がインフラとして必要です。森に入ってこそ、人



——今後の予定について

冬のうちは小別沢の山を具体的に歩き調査を行います。10年という長期スパンでの契約なので、今年の冬は一生懸命この土地の山を知りたいです。春になったら調査結果や今後の施業予定をご案内できる予定です。

と森の両立の仕方を考察することができ、その結果を検証することができ、道ができることで、普段、森を歩かない人、歩けない人と専門家たちが一緒にその森に入ることができるようになります。机上の写真や資料ではなく、実際に「見て、感じて、知ること」の共有が実現することで、現代社会と森、すなわち人と環境、が正しく共存できる道筋が描けるようになるのでは、と考えています。そのため、第一歩が「道つけ」なのです。



足立成亮 あだち・しげあき

2009年に(株)グリーン滝上に入社、林業のイロハを学ぶ。その後、2013年にoutwoodsの屋号を掲げフリーランスの木こりとして独立。現在は森林環境に負荷をかけない環境保全型林業を理念とし、多種多様な森林施業とそこから生まれる森林の姿を提案している。また、森と人や街を近づける取り組みも精力的に行っている。

市からのお知らせ

第6回 小別茶話会

日時：2月21日(月) 16:00-17:30

場所：小別沢会館 (札幌市西区小別沢49)

内容：「里山事業の今までとこれから」について他

※冬季は駐車場がありません。ご不便をおかけしますが、ご理解願います。

*町内会以外の方で初めて参加を希望される方は準備の都合上、事前に左記担当者までご連絡ください。
*新型コロナウイルス感染状況によって中止となる場合があります。その際は改めてご連絡致します。

札幌市農政課 農政課 松里・石堂

☎211-2406

里山事業の スケジュール

